可児市埋文調査報告32

羽崎寺洞１・２号墳
発掘調査報告書

2001. 3
岐阜県可児市教育委員会

羽崎寺洞２号墳石室全景

羽崎寺洞２号墳出土遺物

はじめに

可児市には、数多くの古墳が残されています。現在確認されているだけでも、マウンドを持つ古墳、横穴墓を含めて、その数は、およそ２００基に達します。

可児市では、これらの貴重な遺産を、少しでも多く、我々の子孫に伝えようと日夜努力しています。たとえば、川合次郎兵衛塚１号墳の整備事業や、現在計画中の長塚古墳整備事業などがあげられます。今回調査した羽崎寺洞１・２号墳も、昨年度実施した熊野古墳の調査と同様、古墳を保存して後世に伝えるとともに、内部を公開し、地域の方々の生涯学習の場として提供するための基礎データ収集のために実施いたしました。調査の結果、調査前の予測を上回る成果が得られました。今後は、市民の皆様をはじめ、多くの方々に調査で得られたデータを公開し、生涯学習の教材として役立てていただこうと考えております。

最後になりましたが、地元羽生ケ丘自治会の皆様をはじめ、調査にご協力をいただきました関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成１３年　３月

可児市教育委員会

教育長　渡邊　春光

例　　言

1．本書は、国庫及び県費補助金の交付を受けて実施した、羽崎寺洞１・２号墳発掘調査の報告書である。

2．本書の執筆・編集は、調査担当者である社会教育課主任　吉田正人が社会教育課文化財係長　長瀬治義の指導を受けながら担当した。

3．現場調査は、次の者が参加し実施した。

調査補助員　　水野テツ子　　成尾　孝子

作　業　員　　伊佐治　誠　　岩名　孝代　　上野　晃司　　可児　定夫

北西　幸彦　　香田　公夫　　本田　博志　　水野　良雄

整理作業は、長瀬、吉田が中心となって実施し、水野テツ子、成尾孝子、本田博志が補佐した。

4．本書に掲載した出土遺物、図面、写真は、すべて可児市教育委員会で保管している。

5．現場調査、整理作業の際には、次の方々にご協力、ご指導・ご鞭撻を賜りました。記して謝意を表します。

羽生ケ丘自治会　　渡辺　博人　（敬称略）

凡　　例

1．方位は、磁北である。

2．遺構、遺物の計測値は、水平もしくは垂直の値である。

3．遺物番号は、実測図、図版とも共通である。

4．石室内の側壁は、玄室入り口から奥壁をみて、左手側を左側壁、右手側を右側壁としている。

5．遺物の編年的位置づけについては、猿投窯編年は斎藤孝正氏、川合古墳群編年は長瀬治義氏の編年[1]によった。

本文目次

はじめに ・・・・・・・・・・・・・・1

例言・凡例 ・・・・・・・・・・・・・2

本文目次、挿図目次、表目次 ・・・・3

第1章 調査に至る経緯と
調査の経過 ・・・・・・・・・・4

第2章 立地と環境 ・・・・・・・・・5

第3章 羽崎寺洞1号墳
第1節 調査前の現況 ・・・・・・7
第2節 遺構 ・・・・・・・・・・7
第3節 遺物 ・・・・・・・・・・11

第4章 羽崎寺洞2号墳
第1節 調査前の現況 ・・・・・・12
第2節 遺構 ・・・・・・・・・・12
第3節 遺物の出土状況 ・・・・・・17
第4節 出土遺物 ・・・・・・・・・23
第5節 古墳の時期、追葬 ・・・・26

第5章 まとめ ・・・・・・・・・・26

報告書抄録 ・・・・・・・・・・・・・41

挿図目次

第1図 可児市の主な古墳分布図 ・・5
第2図 羽崎古墳群分布図 ・・・・・6
第3図 寺洞1号墳現況測量図 ・・・7
第4図 寺洞1号墳石室実測図(1) ・・8
第5図 寺洞1号墳石室実測図(2) ・・9
第6図 寺洞1号墳調査後測量図 ・・10
第7図 寺洞2号墳現況測量図 ・・・12
第8図 寺洞2号墳石室実測図(1) ・・14
第9図 寺洞2号墳石室実測図(2) ・・15
第10図 寺洞2号墳調査後測量図 ・・16
第11図 寺洞2号墳遺物出土状況図及び
トレンチ断面図 ・・・・・・18
第12図 寺洞2号墳
出土遺物実測図(1) ・・・・・・20
第13図 寺洞2号墳
出土遺物実測図(2) ・・・・21
第14図 寺洞2号墳
出土遺物実測図(3) ・・・・22
第15図 寺洞2号墳
出土遺物実測図(4) ・・・・24

表目次

第1表 寺洞2号墳
出土遺物集計表 ・・・・・19
第2表 寺洞2号墳
出土土器観察表 ・・・・・19
第3表 寺洞2号墳
出土鉄器観察表 ・・・・・19

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

羽崎寺洞１・２号墳は、可児市羽生ケ丘三丁目公園内に所在する。この２基の古墳は、羽生ケ丘団地が造成されるときに、そのまま現状保存されたものである。周囲は、フェンスにより囲まれ、その前には解説板も設置され、地域の歴史学習の場ともなっていた。

しかしながら、内部は開発前のままの状態で、草木が生え放題となっており、古墳の現状を確認することもままならなかった。

平成１１年に公園のある地元、羽生ケ丘自治会から、「この２古墳付近を整備し、しっかりと歴史学習の場として利用できるようにして欲しい」との要望が市に出された。

そこで、整備する前に古墳の基礎データを得るため、発掘調査を国庫補助事業である、市内遺跡発掘調査事業の一環として実施することとなった。

以下、文化財保護法他、関係法令に基づく手続きを掲載する。

文化財保護法第５８条の２関係

市教委発　平成１２年　７月　４日付　教社第８５号（発掘調査の報告）

県教委発　平成１２年　７月１４日付　社文第３５号の５（受理通知）

市教委発　平成１２年　９月　７日付　教社第８５号（発掘調査終了報告書）

文化財保護法第６５条及び遺失物法第１条関係

市教委発　平成１２年　９月　７日付　教社第１３０号（埋蔵物発見届）

第２節　調査の経過

現場作業は、７月５日から調査補助員２名、作業員８名のスタッフで開始した。

調査は、１・２号墳並行して進めた。１号墳は、当初より石室に使用された石材が、墳丘周囲に散在しており、石室の残存状況も悪いと予想されたが、そのとおり石室は大半が崩壊しており、動いた石などを除去し、順調に調査も進んだ。遺物も出土しなかったため、残存する玄室の実測、玉類等の有無確認のためのふるいかけ作業を実施し、８月３日調査を終了した。

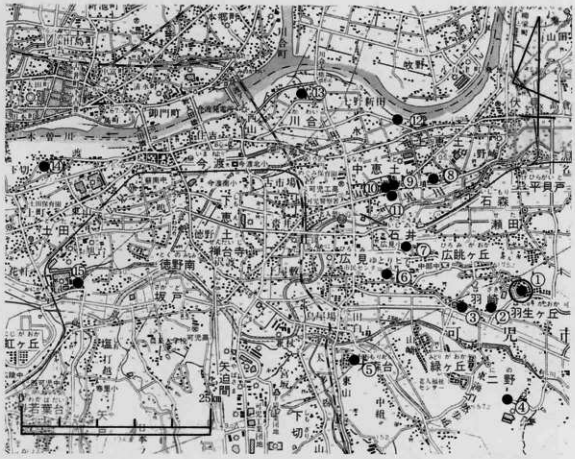
一方２号墳は、樹木伐採直後の状況では、古墳に使用された石材らしいものが、数個顔を覗かせていたが、墳丘らしいものが確認できず、古墳ではないことも予想した。しかしながら、表土を掘り下げにかかると、側壁らしい石が、長方形に巡るようになり、その後、当初から顔を覗かせていた石が、閉塞石であることも判明した。ただ、玄室内には、大木の根株が残っており、その切除には、最後まで悩まされた。調査が進むにつれ、石室もかなり良好に残っているだけでなく、遺物もかなりの量が出土した。その後、調査を進めると床面が２枚あることが判明したほか、閉塞石の南側から攪乱層からではあるが、遺物がまとまって出土した。

この後、実測及びふるいかけ作業を実施した後、埋め戻し、修景作業を実施して、８月２９日に現場作業を終了、９月１０日に現地説明会を実施、以後整理作業に入った。

第２章　立地と環境（第１・２図）

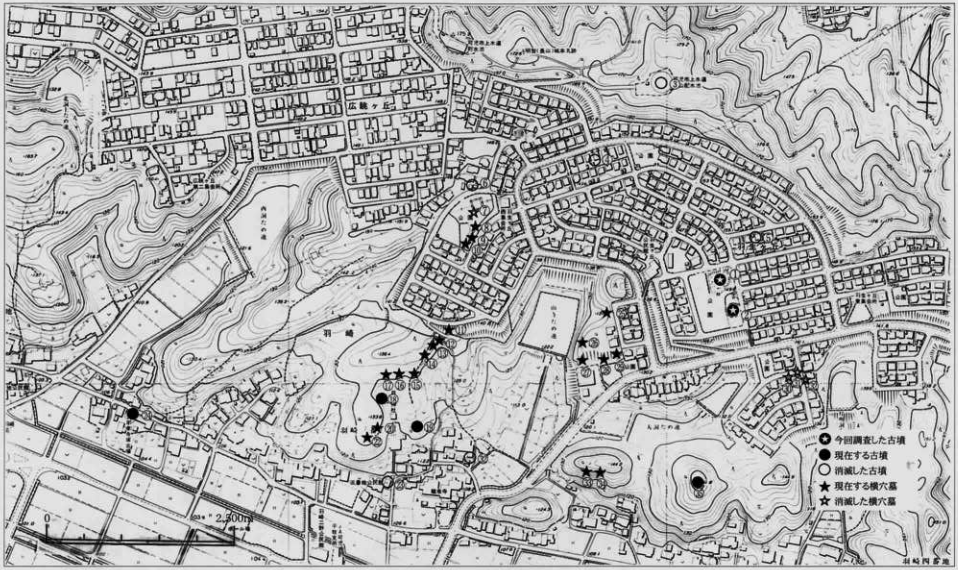
羽崎寺洞１・２号墳は、可児市羽生ケ丘三丁目地内の公園内に所在する。地形的には、可児市中央をほぼ東西に横断する丘陵の南斜面に立地する。古墳群としては、羽崎古墳群に含まれる。この古墳群は、丘陵の南斜面から尾根上に展開し、いわゆる密集型群集墳を形成する。興味深いことに、同一地域にマウンドを持つ古墳と丘陵斜面を掘り窪めた横穴墓が並存する。前者は、丘陵裾及び尾根上に、後者は、丘陵中腹の凝灰質砂岩（サバ）露頭部に築造される。代表的なものとしては、前者では、県指定の不孝寺塚古墳、後者では、同様の羽崎中洞１号横穴墓が挙げられる。現在までにマウンドを持つ古墳12基、横穴墓23基が確認されている。築造期間は、６世紀初頭から７世紀いっぱいまでである。これらのうち、横穴墓の被葬者は、当地域に露頭する凝灰質砂岩を用い、石棺を製作したり、カマドの袖に使う石材を切り出したりした、半農半工の石工集団の可能性が指摘されている。[2]

尚、羽生ケ丘団地造成前の昭和56・57年には、竪穴系横口式類似石室を持った羽崎大洞３号墳をはじめ、14基の古墳が調査されている。



１羽崎寺洞１・２号墳　２羽崎中洞１号横穴墓　３不孝寺塚古墳　４二野鍋煎横穴墓群　５皿屋敷横穴墓群
６熊野古墳　７身隠山（御嶽・白山）古墳　８上野稲荷古墳　９長塚古墳　10野中古墳　11西寺山古墳
12川合狐塚古墳　13川合次郎兵衛塚１号墳　14土田八幡１号墳　１５土田北割田３号墳

第１図　可児市の主要古墳分布図（1：50,000）



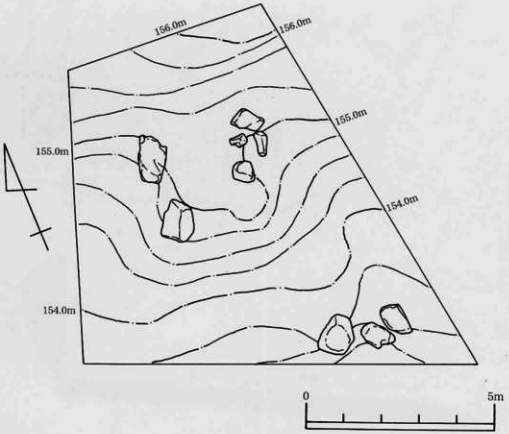
第２図　羽崎古墳群分布図

第３章　羽崎寺洞１号墳

第１節　調査前の現況（第３図）

羽崎寺洞１号墳は、羽生ケ丘三丁目公園内北側上段（標高155m付近）に立地しており、フェンスに囲まれ、雑木に覆われた状態であった。内部の樹木を伐採する前から、フェンスの外側も含め、石室の石材と思われる大型の礫が10数個散在していた。

樹木伐採後に古墳の現況を確認したが、フェンス内中央やや上方に、比高差約１mのマウンド状を呈した部分があり、その周囲には、石室の石材に使用されたと考えられる、数個の礫が顔を覗かせていた。このため、墳丘盛土の大半は流出し、残存状況はさほど良好ではないようであった。

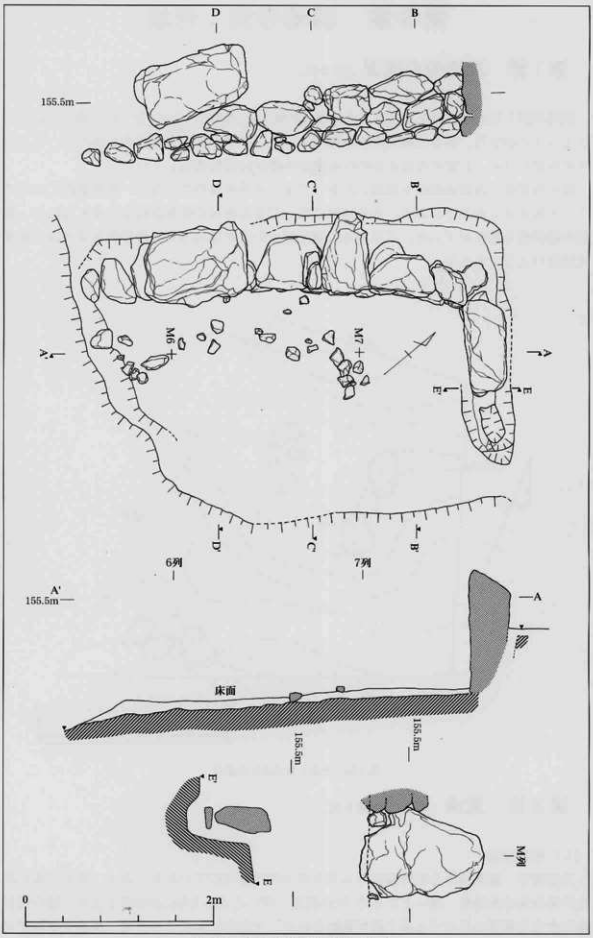


第３図　寺洞１号墳現況測量図

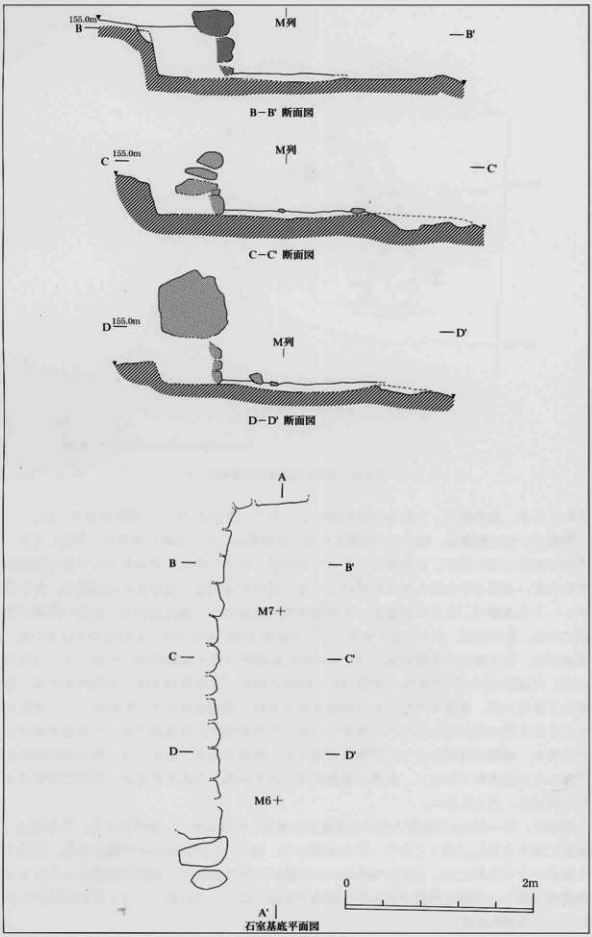
第２節　遺構（第４図～第６図）

（１）埋葬施設

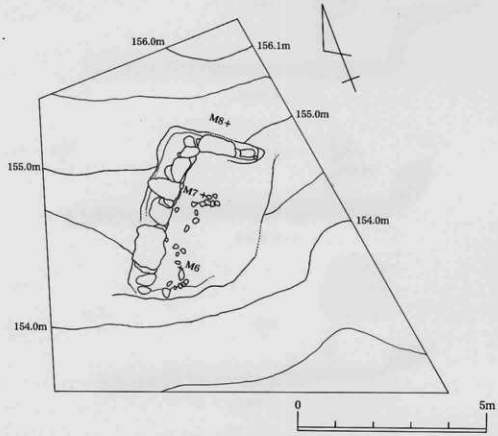
当古墳は、調査前から埋葬施設の石材が部分的に露出していたが、表土、流土の取り除き作業を進めた結果、浅いところで 5cm程度、深いところで20cm程度下より、横穴式石室の玄室左側壁の残存する最上面が検出された。玄室内に堆積する土は、淡褐色粘質土にサバの小ブロックが混じる。掘り下げ途中には、側壁等から崩れ落ちた大きな石材が検出



第４図　寺洞１号墳石室実測図（１）



第５図　寺洞１号墳石室実測図（２）



第６図　寺洞１号墳調査後測量図

されている。最終的に、玄室内の最も深いところで、床面まで67cmの堆積があった。

側壁のうち左側壁は、掘り下げ当初より最上面が検出され、基底石を含め、平均して２・３段が残存していたが、右側壁は、すべてが崩壊したり、攪乱を受けたりして全く残存しておらず、墳丘そのものも削平を受けている。残存する側壁に使用される石材は、大半がチャートの角礫で、次に石英斑岩、その他少量ではあるが、凝灰質砂岩、泥岩の角礫が使用される。各石材は、大きなものを除けば、長辺を主軸に直交させ、小口積みとしている。基底には、玄室側に出る幅が20～35cm程度の比較的小型の石材が用いられ、２・３段目には、同様に40～65cm程度の中型の石が使用される。３段目以上は、不明な点が多く断言はできないが、残存するものから判断するならば、壁面に向かっての幅が、１ｍを超えるような大型の石が用いられたと考えている。この状況は、当地域において調査された他の古墳や、西隣の地域にある広見熊野古墳などと同様である。現状では、各石材の隙間に小礫は入れ込まれていない。側壁の横断面は、高さが低いためもあるが、顕著に持ち送られた状況は、見られない。

奥壁は、65×48cmを測る大型の石英斑岩を使用した鏡石が、１枚残存する。この石は、地面に接する部分が尖っており、その両側には、高さ20cm程度の石が置かれる。残存する鏡石のすぐ左側には、底面の幅約50cmの掘り込みがあるが、左側壁の角から残存する奥壁端の幅や、寺洞２号墳の状況から判断するならば、ここには、もう１枚の鏡石が使われていた可能性が高い。

床面は攪乱を受け、わずかな礫床が残されていただけである。礫床に使われる石材も大

半がチャートの小角礫で、側壁と同様な石質である。大きさは、長辺が10～20cm程度である。
床面は、地山の上に厚さ約10cmで、サバの小ブロックが混じった赤褐色粘質土を固く叩き締めた敷土により形成されている。また、床面は、地山がやや開口部の方に傾斜して削られているためか、完全な水平とはなっていない。

次に、玄室を取り囲む掘り方について述べる。まず縦断面をみると、奥壁裏側の地山面から玄室側まで幅約55cm、底面まで約65cmの深さで掘り下げているが、床面部分は、掘り方底面よりも15cm上で止めている。3本の横断面図では、奥壁から入口へ向かい、地山面からそれぞれ55、32、20cm掘り下げて墓壙を築いている。玄室入口に近づく程掘り下げ幅が浅くなるのは、旧地形の傾斜に起因するものである。掘り方から側壁の基底石が設置されるまでの幅は、基底裏側まで60～70cmである。基底石は、掘り方底面にほぼ直接置かれる。側壁、奥壁とも裏込めには、敷土とほぼ同質な土が充填されている。尚、側壁掘り方底面レベルについても、床面部分と同様開口部に向かって緩やかに傾斜し、この結果、側壁基底石下面レベルも下方へ傾斜している。

最後に、玄室の形態、規模について記述する。まず、平面プランであるが、左側壁部分と開口方向南側が削平されているので、玄室と羨道、前庭部の明確な区別があるかなどは、不明であるが、残存部分の形状からわかることは、C－C′部分に最大幅を持つ、胴張りの隅丸長方形プランを呈する点である。恐らく、羨道はあったとしても、比較的短いものであったと考えている。奥壁と側壁の接する部分の角度を緩めるために石を1個入れている。その他の形状は不明である。残存する規模は、主軸長が最大で3.95m、最大幅が1.64mである。主軸方向は、N-40°-Eである。

（2）墳丘

寺洞2号墳の墳丘は、プライマリーな盛土がほぼ完全に流出、又は、削平されており、盛土の状態、墳形、規模等は不明である。ただ、地山の岩盤の削り出しが南側の一部で認められ、弧を描くように思われる。円墳であったと想像している。

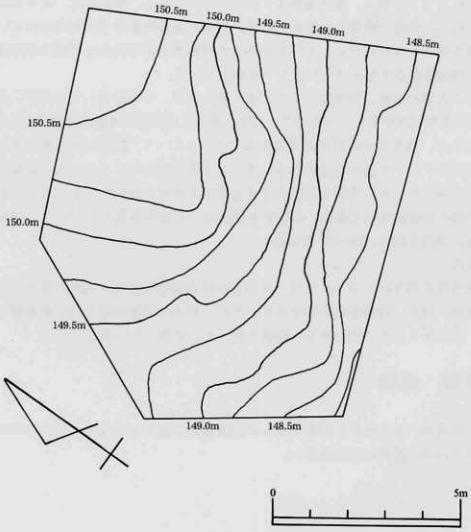
第3節　遺物

寺洞1号墳は、表土中から図化できない山茶碗の小破片が2点出土したほかは、墳丘及び玄室内からは、遺物の出土はない。

第４章　羽崎寺洞２号墳

第１節　調査前の現況（第7図）

羽崎寺洞２号墳は、羽生ケ丘三丁目公園内下段（標高150m付近）に所在し、１号墳同様、フェンスに囲まれている。当古墳は、１号墳とは異なり、周囲に石室に使用されたと思われる石材は見当たらず、また、現況からは、等高線が南へ尾根状に突出しているだけで、マウンドらしい高まりは確認できなかったため、担当者としては、古墳でない可能性も感じた。



第７図　寺洞２号墳現況測量図

第２節　遺構（第８図～第10図）

（１）　埋葬施設

調査前、古墳でない可能性も感じた担当者であるが、実際に表土を除去し、掘り下げ始めると、表土の下数cmぐらいで、当地域の古墳の盛土に通有に見られる、赤褐色粘質土にサ

バの小ブロックが混じる層が検出され始め、比較的大型の角礫も顔を覗かせ始めた。そのため、周囲にピンポールを突き刺した結果、同様な石の存在が確認された。これにより、古墳であると確認され、更に掘り下げて行った。その後、掘り下げが進むにつれ、玄室中央付近と閉塞石付近に大木の根株が当たることが判明し、その除去に悩まされることになった。

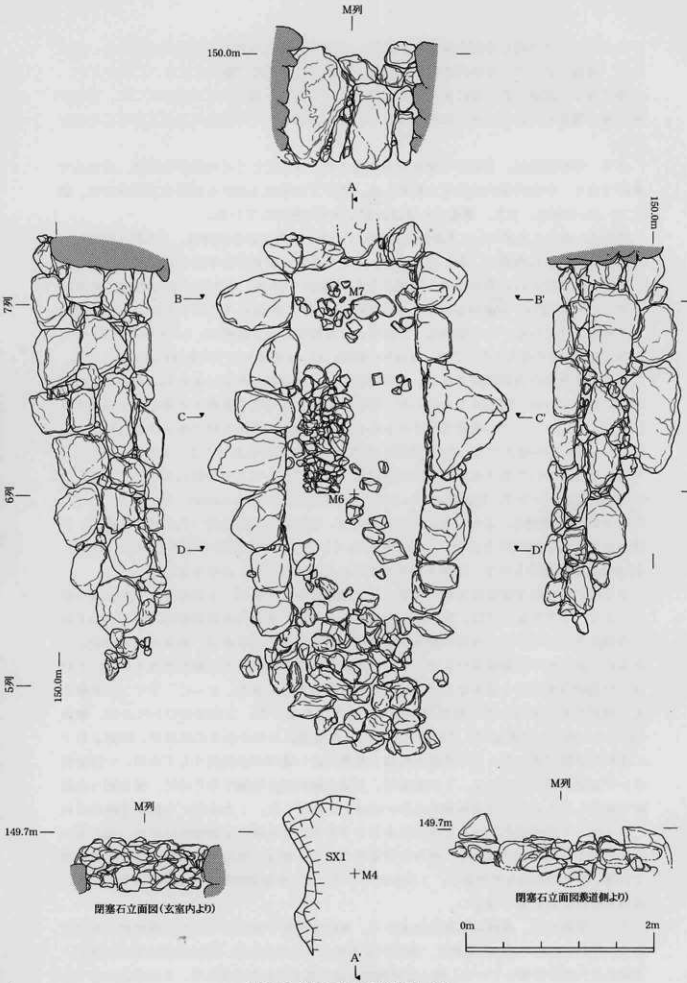
さて、埋葬施設は、当初の予想を完全に覆され、幸いにしてその残存状況は、きわめて良好であり、単室の横穴式石室と判明した。残存する側壁上面から床面までの深さは、最大で1.4mを測る。また、閉塞石もほぼ良好な状態で検出している。

側壁は、両方とも平均して３段程度残存している。使用される石材は、１号墳と同様に、大半がチャートの角礫で、次に石英斑岩、そして砂岩、泥岩がわずかではあるが使用されている。両側壁の石の積み方は、基底石として幅40～60㎝、厚さ20～30㎝程度の比較的小型の石材を使い、２段目以降は、幅60㎝以上、厚さ30㎝以上のより大型の石材を使用して積み上げている。この傾向は、左側壁より右側壁の方が顕著で、1.3×0.75×0.6mという大型の石材も使用されている。各石材の隙間には、小礫がかなりの数埋め込まれている。こちらも左側壁の方が顕著である。この調査では古墳保存のため、基底石の裏側までは調査しなかったため、断言はできないが、残存する最上段の石を観察する限り、小口積みされるものは少なく、この形態で積まれるものは、比較的大型の石材が多い。側壁の断面からは、基底石間の幅よりも上方の石材間の幅が狭く、やや持ち送られていることがわかる。

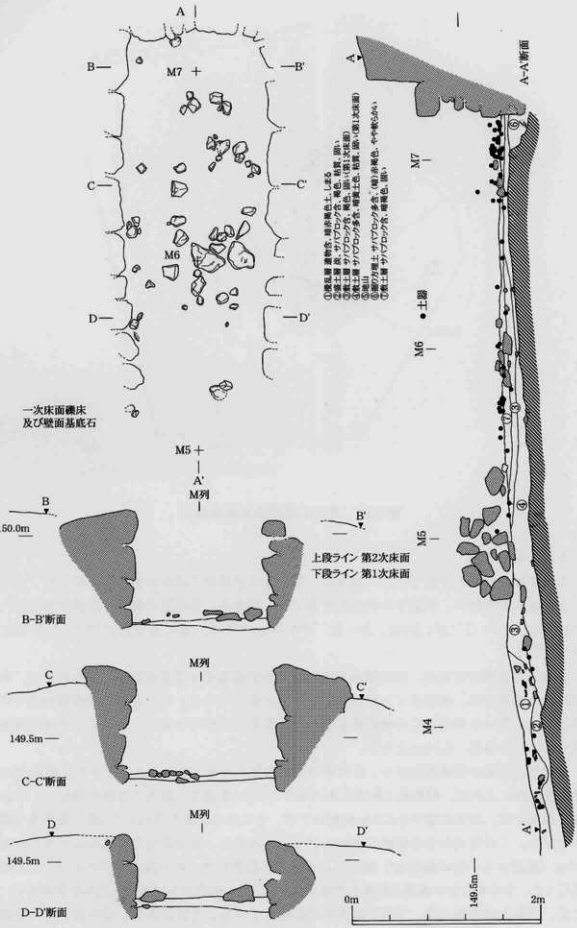
次に奥壁について述べる。当古墳の奥壁は、基底石として２枚の鏡石を用いている。向かって左はチャートで、表面に出ている部分の大きさは、1.28×0.68m、右もチャートで、0.91×0.48mを測る。この２枚の石の隙間には、細長い２個の角礫（石英斑岩、砂岩）が組み込まれる。鏡石の上には、２段が残存していた。ここに使用される石材は、幅30～40㎝程度の小型のもので、側壁を構成するものと比較しても、より小さい。

２号墳の床面は２枚検出され、便宜上、上部床面を２次床面、下部床面を１次床面と呼ぶ。まず、２次床面上には、第９図からわかるように、玄室内の奥壁付近、Ｍ６－Ｍ７杭の右側壁寄りを中心に、角礫の礫床面が検出されている。大きさは、拳大のものが中心であるが、Ｍ７杭の右側壁寄りには、３つの中型程度の角礫が並んで検出されている。これは、位置的なものから見るならば、棺台の可能性もある。また、Ｃ－Ｃ’ライン上の集石も、偶然かもしれないが、棺部分が残ったようにも感じる。２次床面のレベルは、標高149.1～149.2mであるが、このレベルでは、側壁基底石のかなりの部分が、床面より下に隠れた状態であった。この床面からは、完形に近い遺物が多数出土しており、一括資料として価値が高いといえる。１次床面は、玄室の縦断面を実測するために、断ち割った段階で検出したもので、２次床面から5～10㎝下に存在した。１次床面にも礫床は検出されているが、２次床面と比べるとかなりまばらである。Ｍ６杭の左側壁部分には、他のものよりも大きな角礫が２個あり、棺台の可能性がある。礫床に使用される角礫は、２次床面と同様、拳大程度のものが多い。１次床面からは、２次床面構築時に攪乱を受けたためか、遺物の量はさほど多くはない。

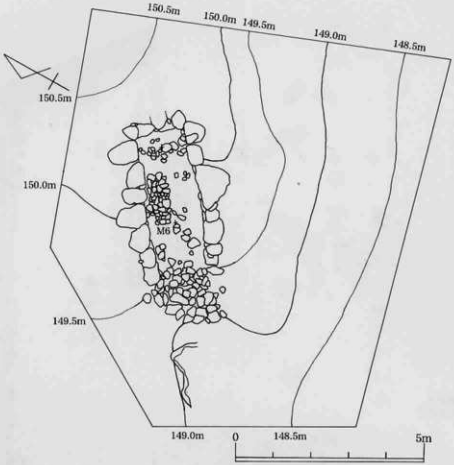
さて、閉塞石は、最初にも触れたように、良好な状態で検出している。両側壁の端付近から、手前に1.5×1.7mの範囲に、長辺25㎝前後のものを中心に、55㎝ほどの高さに積み、玄室入り口部分を覆っている。尚、この閉塞石は、検出された状況から、２次床面に伴うも



第８図　寺洞２号墳石室実測図（１）



第９図　寺洞２号墳石室実測図（２）



第10図　寺洞２号墳調査後測量図

のと考えられる。

１次床面構築時の平面プラン（第９図）は、さほど顕著ではないものの、Ｃ－Ｃ’ライン上に最大幅を持つ、胴張りの隅丸長方形プランである。各横断の幅は、床面でＢ－Ｂ’が1.46m、Ｃ－Ｃ’が1.55m、Ｄ－Ｄ’が1.40mである。更に玄室入口では、1.37mにまで狭まる。

玄室と羨道部の区別は、石の積み方などによる明確な変化は見受けられないものの、両側壁とも南端では、地山ラインが角度をつけて上昇している。このため、羨道部分まで石積みは続かないものの、この地点を玄室入口とすることができよう。従って、玄室は無袖式で、その全長は、3.81mとなる。

最後に、石室の墓壙掘削から、各壁面の石材の積み方までをみることとする。第11図の墳丘断面図によれば、側壁最上段墳丘側の端から1.5m手前で、地山の掘削を開始し、50㎝程度奥までは、非常に緩やかに5㎝程掘り下げ、そこから岩盤を含め1.7m強、急角度で掘り下げる。この地点から右側壁の裏側までは、55㎝ある。奥壁部分は、このレベルから約20㎝（奥壁から手前の幅40㎝）掘り下げて鏡石を設置する。その後、サバの小ブロックの混じった、やや軟らかい赤褐色粘質土で埋める。この後、先程のレベルで、地山を整地する。ただ、玄室入口方向へは、下方に緩やかに傾斜している。１次床面は、地山面上に、奥壁からＭ６杭付近までは、厚さ5㎝程度、そこから入口付近までは、地山面が傾斜しているた

め、最大で厚さ25cm程のサバ小ブロックを多く含み、硬く締まった暗黄土色粘質土を敷く（④層）。更に、M６－M７杭中間あたりから、閉塞石南の部分までの低い部分には、サバ小ブロック混じりで、硬く締まった褐色土を敷き（③層）、床面を平らにしている。そして、その上に5～10cmの厚さの敷土（⑦層）を入れ、２次床面を形成している。

次に側壁は、地山面上に基底石を置き、底面からおよそ40cmまでは、石を１段積んだら、一層、というように、裏込めをしていくが、それより上は、残存部分ではあるが、大きな石を２段積み上げ、一気に裏込めの土を入れて補強している。

当古墳の主軸方向は、N－50°－Eである。

（２）墳丘

羽崎寺洞２号墳の墳丘は、古墳の保護のため、右側壁のC－C’の延長線上を断ち割っただけである。この部分の状況は、掘り方と側壁の間に裏込めとして入れた土が、唯一、人工的に盛った土で、以下はすべて地山であった。より上位の盛土は、流出してしまっていた。このため、奥壁や左側壁の墳丘側も同様な様相を示すと思われる。ただ、玄室断ち割り時に検出された、後で述べるSX１下部に、炭やサバの小ブロックを含み、硬く締まった褐色粘質土層(第11図②層)が15cm程の厚さで残っているだけであった。

今回の調査は、１号墳と同様、その範囲をフェンス内だけに留め、墳丘端までは確認していないため、墳形、墳丘の規模は、明らかではない。ただ、石室の状況を同じ羽崎古墳群のものと比較するならば、おそらく直径10数mの円墳となるであろう。

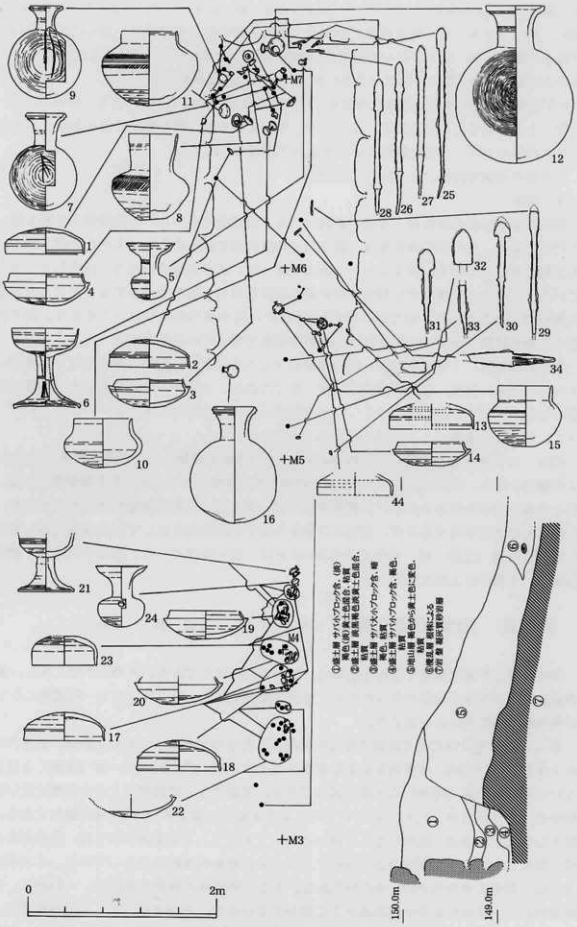
（３）その他の遺構

SX1　当古墳の玄室入口から、約2mの地点で、③層を掘削してできたと考えられるSX１が検出された。形状は不定形で、玄室入口側とその主軸ライン上よりも左側壁寄りには、何とか掘り方がわかるものの、右側壁寄りでは、落ち込みの肩は確認できなかったため、全体の大きさは不明であるが、玄室入口側から緩やかな傾斜を成して30cm落ち込み、そこに堆積した層（①層）は、少なくとも2m以上は、南へ伸びている。覆土中からは、須恵器類が、８個体以上出土している。

第３節　遺物の出土状況（第９・１１～１４図、第１～３表）

羽崎寺洞２号墳に関連する出土遺物は、第１表のとおりである。当初の予想に反し、埋葬施設の残存状況が良好であったため、遺物の量もまとまっており、かつ一括遺物としての資料的価値は高いといえよう。

第11図は、当古墳に伴う遺物の出土状況を表したものである。これによれば、玄室内の出土遺物については、平面的な出土位置から見るならば、奥壁付近の一群（北群）と玄室入り口付近の一群（南群）の２群に区分できる。北群では、比較的早くから完形に近い遺物が出土しているが、1,3,11については、２次床面から高さが10～25cmも離れており、群として見る場合は、除外しなくてはいけないであろう。２次床面上からは、完形品を含め、図化したもの１２個体(2,5～10,12,25～28)の遺物が面的に出土している。１次床面上では、図化できたものは、4のみである。さて、当地域の後期古墳には、一般的に、奥壁角付近に土師器小型甕が副葬品として置かれているが、本墳では、１・２次両床面とも破片さえ出土していない。最初から無かったのか、攪乱されて紛失しているかは、不明



第11図　寺洞２号墳遺物出土状況図及びトレンチ断面図

	須恵器								フラスコ形瓶	提瓶	坏類片	査類片	器種不明破片	金属器		
	坏蓋	坏身	高坏	短頸壺	直口壺	査蓋	甕	瓶						鉄鏃	刀子	合計
2号墳1次床面		1		1										1	1	4
2号墳2次床面	3	(1)	1		1		1	1	1	3				6		17(1)
2号墳玄室崩り割り											(3)	(2)	2	2		2(5)
2号墳閉塞石											(9)					(9)
2号墳玄室埋土	2	1			1						(9)			4	5	13(9)
SX1	2(2)	4(12)		1		1		1			(104)	(1)	(2)			9(121)
合計	7(2)	6(13)	2	2	1	1	1	2	1	3	(125)	(1)	(4)	13	6	45(145)

( )は破片点数

第1表　寺洞2号墳出土遺物集計表

番号	名称	法量(cm) 口	法量(cm) 後	法量(cm) 高	法量(cm) その他	出土位置	取上番号	成・整形、調整	色調	焼成	胎化部残存率(%)	轆轤回転	特記事項
1	須恵器 坏蓋	12.3	4.1			玄室埋土	5,6,8,9,20	天井部ヘラケズリ,内外面ナデ,口縁端部内面凹線。	暗灰色	良好	100	左	
2	坏蓋	12.8	4.3			2次床面	13,23,25,39,74,79,82	天井部上方ヘラケズリ後ナデ,他内外面ナデ,天井部縁は,凹線に近い口縁端部内面は一部凹線になる。	暗黄灰色	良好	95	右	
3	坏身	10.3	4.6	最大径12.7	玄室埋土	9		底部付近外面ヘラケズリ,内外面ナデ,口縁端部内面幅広凹線。	灰白色	良好	100	左	外面自然釉,受け部外面の段は途中から凹線に,歪みきつい。
4	坏身	11.5	5.1	最大径13.7	1次床面	14,15,17,18,22,26,36,38,72,73,83		底外面ヘラケズリ,他内外面ナデ,口縁端部内面面取。	青灰色	やや不良	90	左	凹線は面取とも言える。
5	蓋	7.8	8.9	鈕部最大径5.9	2次床面	32		鈕下半ヘラケズリ,他内外面ナデ。	淡灰褐色	やや不良	100	右	注口部の芽孔無し,頸部外面にヘラ記号。
6	高坏	10.4	12.8	底径12.8	2次床面	7		2段透3方向,坏部底外面ヘラケズリ,内外面ナデ。	暗灰色	良好	100	左	透上段1方向無し。
7	短頸	5.9	15.5	最大径10.6	2次床面	24		頸部表裏力キ目痕,球状の方6個し,他内外面ナデ,頸部外面に2本の凹線。	淡黄灰色	やや不良	100	左	球状部外面ヘラ記号。
8	直口壺	7.8	13.5	最大径12.1	2次床面	3,6		底部外面ヘラ切り,竹状ヘラケズリ,その上部,ヘラケズリ後ナデ,頸部の上下連続刺突文,口縁端部内面洗い面取。	灰白色	良好	95	右	
9	短瓶	5.2	14.8	最大径11.4	2次床面	16,17		球状部外面ヘラケズリ,他内外面丁寧なナデ,頸部に凹線痕。	淡黄灰褐色	やや不良	100	右	球状部外面ヘラ記号。
10	甕	9.1	7.8	最大径12.3	2次床面	10,21,27,28,33		底部から外面最大径下部まで〜ラケズリ後ナデ,その他内外面ナデ。	灰白色	良好	50	左	内外面に自然釉,外面にヘラ記号。
11	短頸壺	8.7	11.8	最大径14.9	玄室埋土	1,4,19,26,35		底部外面及び付近ヘラケズリ後ナデ,内外面ナデ,口縁端部内面極浅い凹線。頸部最大径を挟み,タタキ痕のような文様帯。	青灰色	良好	95	右	外面に自然釉,低部にヘラ記号,挽成時は蓋を載せて挽く。
12	提瓶	9.4	24.9	最大径18.8	2次床面	2		球状部表裏丁寧なカキ目,その後側面を中心にタタキ,頸部に2本の凹線。	灰白色	やや不良	95	左	
13	坏蓋	13.0	(4.0)			玄室埋土	65	天井部外面ヘラケズリ,他内外面ナデ,口縁端部内面面取。	青灰色	良好	30	右	
14	坏身	10.4	3.8	最大径12.3	2次床面	62		底部外面付近ヘラケズリ,他内外面ナデ。	暗灰白色	良好	100	右	受部外面工具による凹線
15	短頸壺	8.9	9.7	最大径11.7	1次床面	42,59,60,63,64,66,67,69,71,76		底部外面及び付近ヘラケズリ後ナデ,他内外面ナデ,最大径上部に2本の凹線(ナデにより擦り消されている。	下半淡黄灰色上半鈍灰色	良好	95	右	
16	フラスコ形瓶	6.3	18.5	最大径14.0	2次床面	11		頸部表裏面ヘラケズリ後ナデ,他内外面ナデ,側面に1本の凹線,頸部に2本の凹線(ナデにより擦り消し)。	灰白色	良好	100	右	底部外面にヘラ記号。
17	坏蓋	12.8	4.5			SX1	46,50,51,53,54,57	天井部外面ヘラケズリ,他内外面ナデ,口縁端部内面面取。	淡青灰色	やや不良	80	右	
18	坏蓋	13.0	4.9			SX1	50,51,53,56,57	天井部外面ヘラケズリ,他内外面ナデ,口縁端部内面浅い面取。	淡青灰色	やや不良	80	右	
19	坏身	11.0	4.1	最大径13.4	SX1	51		底部外面及び付近ヘラケズリ,他内外面ナデ。	淡青灰色	やや不良	90	右	
20	坏身	(11.7)	4.1	最大径13.8	SX1	52,53		底部外面及び付近ヘラケズリ,他内外面ナデ。	淡青灰色	やや不良	60	左右	
21	高坏	—	(8.7)	脚部径8.9	SX1	45,51		内外面ナデ,坏部外面に2本の凹線。	淡青灰色	やや不良	70	右	
22	坏身	—	—	最大径14.2	SX1	56,57		天井部外面ヘラケズリ,他内外面ナデ。	淡青灰色	やや不良	50	右	
23	査蓋	10.0	4.2			SX1	46,50,52,53,55	天井部外面ヘラケズリ,他内外面ナデ。	灰白色	良好	70	右	
24	蓋	7.9	10.0			SX1	49〜51	鈕部下半へラ切り後稚なナデ,上方はケズリ,他内外面ナデ。	灰白色	良好	95	左右	底部外面にヘラ記号。
44	坏蓋	11.8	—			2次床面	61,70,81	内外面ナデ	灰白色	良好	10	—	

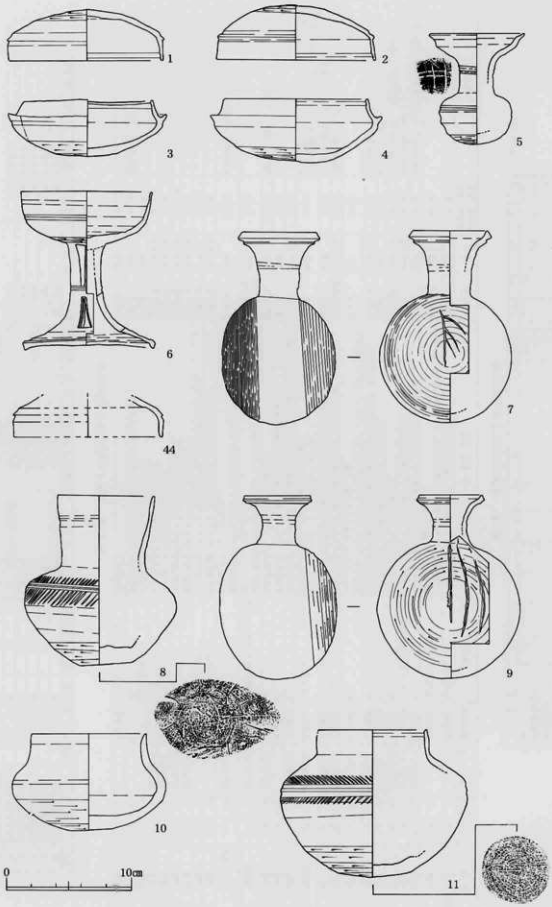
( )は残存する法量

第2表　寺洞2号墳出土土器観察表

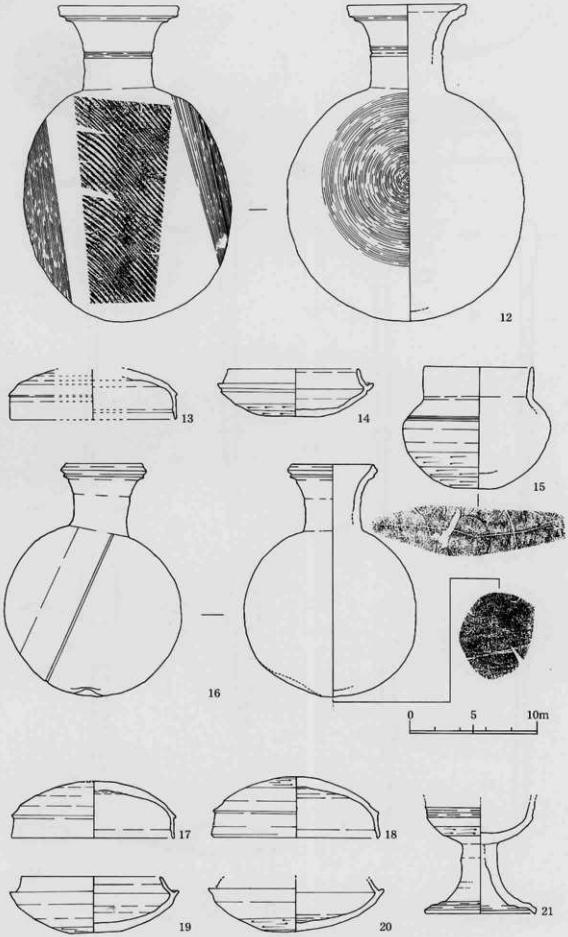
番号	名称	法量(cm)	出土位置	取上No.	特記事項	番号	名称	法量(cm)	出土位置	取上No.	特記事項	番号	名称	法量(cm)	出土位置	取上No.	特記事項
25	細根系柳葉系鉄鏃	(18.0)	2次床面	30		32	細根系長三角系鉄鏃	(3.8)	2次床面	44		39	刀子	(4.3)	玄室埋土		
26	細根系柳葉系鉄鏃	16.4	2次床面	29		33	鉄鏃	(5.2)	玄室埋土	41		40	鉄鏃	(2.8)	玄室無割り		
27	細根系柳葉系鉄鏃	(15.8)	2次床面	31		34	刀子	(9.2)	1次床面	78	木質痕有	41	鉄鏃	(3.4)	玄室埋土		
28	細根系柳葉系鉄鏃	(14.3)	2次床面	34		35	刀子	(2.6)	玄室埋土	68		42	鉄鏃	(2.2)	玄室埋土		
29	細根系柳葉系鉄鏃	(13.3)	1次床面	75		36	広根系長三角系鉄鏃	(6.7)	玄室断割り			43	刀子	(4.3)	玄室埋土		
30	細根系長三角系鉄鏃	(11.3)	2次床面	43		37	刀子	(7.0)	玄室埋土		木質痕有						
31	細根系長三角系鉄鏃	(8.7)	玄室埋土	58		38	刀子	(5.3)	玄室埋土		木質痕有						

( )は残存する法量

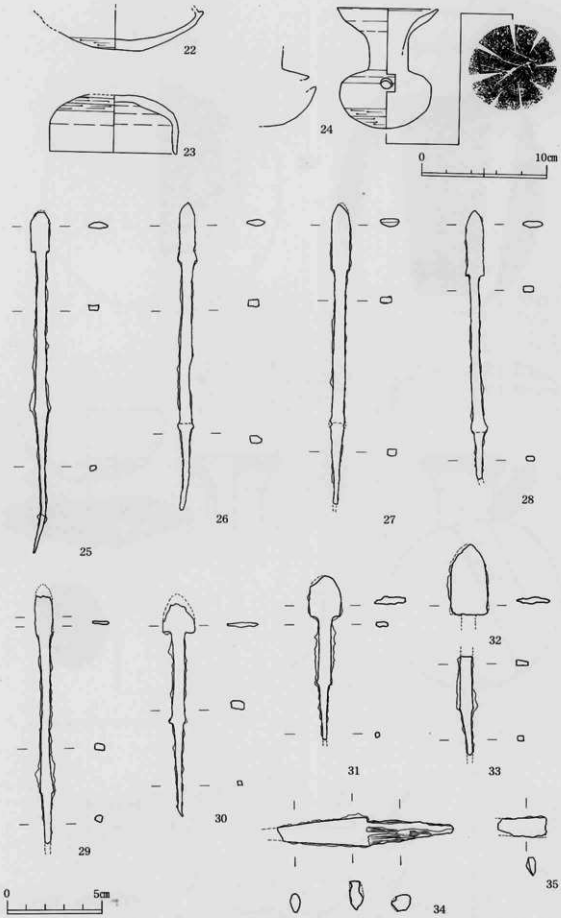
第3表　寺洞2号墳出土鉄器観察表



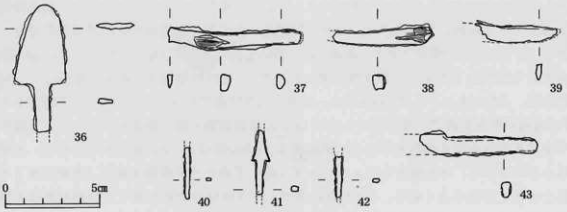
第12図　寺洞２号墳出土遺物実測図（1）



第13図　寺洞２号墳出土遺物実測図（2）



第14図　寺洞２号墳出土遺物実測図（3）



第15図　寺洞２号墳出土遺物実測図（4）

である。

南群は、遺物がやや散らばって出土している。このため、原位置を保っているものがどれかを見極めることは簡単ではないが、２次床面に伴うものは、出土したレベルから判断するならば、14,16,30,32,44の５個体ということができよう。16は左側壁の玄室入り口付近において単独で出土している。１次床面に伴うものは、15,29,34の３個体である。15は、床面直上から天地逆の状態で出土している。

さて、玄室内以外では、後世の攪乱、或いは追葬時に一括廃棄されたと考えられる、玄室南側のSX１から出土した遺物がある。ここからは、図化できたものだけでも８個体あり、その他図化できないような細片も多数出土している。遺物は、面的には大きくは広がらず、直線的に数個体ずつ、点々と３つ程度のまとまりに分かれて出土しているが、接合関係は、１つのグループ内にとどまらず、ほとんどの個体が、２グループ以上にまたがって接合している。玄室内出土の遺物と直接の接合関係はないものの、23のように、前者とセットとなるような遺物も出土しており、SX１出土遺物は当古墳の副葬品の一部とみても差し支えないであろう。

第４節　出土遺物

（1）北群１次床面

4は坏身で、口縁立上がり基部外面は段をなし、口縁端部内面に面取りがされる。底部に平坦面の痕跡を認められるものの、丸味を持ち、底部全体と同化傾向にある。口径も11cmを超える大きなものであること、口縁付近のプロポーションのシャープさから、（+）期、川合古墳群後Ⅲ期に位置付けられる。

（2）北群２次床面

2の坏蓋は、天井部、口縁基部外面ともシャープさに欠け、口縁端部の調整も凹線となる。6は、半長脚２段３方向透かしを持つ高坏。坏部と脚部にそれぞれ２本の凹線が入れられる。興味深いことに透かしのうち上段には、２方向しか透かしが無い。その透かしも坏部との接合面に粘土を切り込んだ痕跡があり、接合後に透かしを入れたことがわかる。胎土は細かい砂粒を多く含む。透かしが１つだけ空けられていないことを除けば、川合稲荷

塚１号墳出土の高坏[13]と同様な形態である。8は直口壷で、口縁内面にわずかに面を持つ。肩部上下に連続刺突文が施され、中央に凹線を一本入れる。底部外面は平坦面を持ち、分厚く、ケズリのみの整形である。底部には、細い工具によるヘラ記号が残る。7,12は提瓶。両者とも胴部に丁寧なカキ目調整が施されるが、7の円球部側は、施文の幅が広い。口縁部には、どちらもシャープな段を持ち、内側には受け部があり、12の方がより明瞭である。7は焼成がやや不良で、後に述べるSX１出土の須恵器類と似た焼成具合である。２個体とも羽崎大洞白山塚古墳出土のものと酷似する[14]。10の坩は、１２の直下からの出土。底部には小さいながら、平坦面をもつ。ヘラケズリ後、丁寧なナデ調整を施す。羽崎大洞１号墳出土の坩と形態がよく似る。5は小型の瓶で、注口部分の穿孔が無く、口縁内面は受け皿状を呈する。9は小型の提瓶で、口縁部は段がなく、その痕跡がわずかに膨らむ。胴部は両面ともカキ目は無く、ヘラ記号のある側は、ヘラケズリのみ、扁平な方は、ケズリ痕はなく、丁寧なナデ調整が施される。5,9とも同様なヘラ記号が描かれ、胎土、色調とも全く同じであることから、同時焼成の可能性が高い。25～28は、全て細根系柳葉系鉄鏃[15]で、26は欠損部が無いため大きさを記すと、全長16.3㎝、刃部長3.2㎝、同幅1.0㎝を測る。茎部断面は、長方形を呈し、幅0.6㎝、厚さ0.4㎝と細く、薄い。25、26とも自然のものと考えられるが、茎部先端が緩やかに曲がる。ここでの出土遺物は、5,9が形態が小型化するという点と、5が川合次郎兵衛塚１号墳東副室出土の瓶に形状がよく似ている[16]点などから、他の遺物より新しい時期と考えられ、Ｈ－50号窯期、川合古墳群後Ⅴ期に、その他の遺物は、形状及び酷似した遺物の出土した古墳の時期を考え併せるならば、前者の一時期前のＨ－44号窯期、川合古墳群後Ⅳ期に位置付けられる。尚、この両者が同時並存したかどうかについては、次節で述べることとする。

（３）南群１次床面

15は、須恵器の短頸壷である。厚めの底部に小さな平坦面を持ち、ナデによりその角を滑らかに仕上げる。肩部には、２本の細い凹線が入るが、ナデ調整によりやや不明瞭になっている。頸部は、直角に立上がり、外面はツルツルする。このため、蓋をかぶせての焼成ではない。底面には、8と同様なヘラ記号を持つ。こうしたことから、Ｈ－44号窯期に比定できようが、出土位置が第１次床面直上ということから、確実な時期差が生ずる。このため、Ｈ－44号窯期でも（＋）期に近い時期と考えたい。29は前項と同様な細根系柳葉系鉄鏃であり、34は、刀子の刃部から柄の部分で、刃部先端がわずかに欠損している。柄部の長さ4.6㎝、木質痕を認める。

（４）南群２次床面

14は坏身で、口径10.4㎝とかなり小さくなっている。口縁端部内面には、凹線も消滅し、丸く収まる。基部外面も完全な凹線となり、端部も丸味を増す。底面には平坦面を持つが、ケズリ痕をそのまま残す。16のフラスコ形瓶は、口縁部の形状が7の提瓶と酷似しており、シャープな有段状をなす。胴部はきれいな球状を呈し、側面にはうっすらと凹線が残る。底面には窪みを持ち、極細の串状工具により記号を施す。44は坏蓋で、14に隣接して出土しており、胎土もよく似て砂粒が多く、セットとなる可能性が強い。また、破片が玄室外SX１の南側出土のものと接合している。口縁部が、天井部との接点から突出した上で、まっすぐ下に伸び、端部は丸く収まる。天井部端の段も、ほとんど痕跡程度である。30は細根系長三角系鉄鏃、32は広根系長三角系鉄鏃で、これまで述べたものとは形状が異なる。

14,44は大きさ、口縁部等の仕上げ手法から、H－50号窯期、川合古墳群後Ⅴ期の範疇で捉えられようが、14は、底面の平坦部が残ることや口縁部が外反してしっかりと立上がることを考慮すると、H－50号窯期中で、少なくとも前半に位置づけられよう。16は、胎土に白く細かな砂粒が多く含まれている点や黒く焼けている部分がある等、2,8とも共通点を持ち、その上、出土状況を含めれば、北群と同時期のH－44号窯期に比定できる。

（5）玄室内の出土遺物

ここで触れるものは、確実に床面から浮いて出土したものと、出土地点が不明なもので、1,3,11,13,31,35～43が該当する。

1は、天井部がヘラケズリ後のナデ調整により丸く、口縁との接点は有段が明瞭でシャープだが、その幅は狭く、立ち上がりは天井部端よりやや突出し、短く直線的に伸び、口縁端部内面に凹線を持つ坏蓋である。3の坏身は、歪みを持つものの、完形品である。口縁部は、内面に凹線を持つタイプで、底面の平坦部は、ナデにより目立たなくしている。北群1次床面に伴うものと考えても良いであろう。11の短頸壺は、肩がよく張り、底部外面はヘラケズリの後、ナデ調整を施して丁寧に仕上げている。口縁端部近くでやや内彎し、内面には擬凹線を持つ。外面は自然釉が付着しておらず、蓋をかぶせたまま焼成を行なったと考えられる。肩部の上下には、細かなタタキ痕に似た施文がされた後、2本の凹線をつける。胎土、焼け具合から、23の壺蓋とセットになる可能性が高い。時期的には、3個体ともH－44号窯期とできようが、23は肩の張りや調整の丁寧さなどから、若干時期が古いことも考えられる。13の坏蓋は直径13.0cmと大きく、天井部端の段から口縁端部へのプロポーションがシャープで、整形、調整とも丁寧である。口縁端部も面取りされる。出土位置は離れているが、器形などの特徴から4とセットになる可能性を持ち、（＋）期に比定できる。31は、軸部が3.4cmと短い細根系長三角系鉄鏃、36は刃部が4.2cmと長い広根系長三角系鉄鏃である。35と37～39、43は刀子片で、37、38は柄部の木質が残る。

（6）SX1出土遺物

SX1から出土した遺物で図化し得たものは、17～24の8個体で、この他にも数個体分の破片が出土している。24の甕以外は、全て焼成が不良で、淡青灰色を呈しており、細かい砂が混じりるため、ヘラケズリ時の砂粒の動きが目立つ。器面も摩滅しやすい状態となっており、同時焼成の感が強い。17・18の坏蓋は、天井部が丸く、その端は滑らかな段を持ち、口縁部との接点は、シャープさを保ちながらも滑らかで、口縁端部は面取りされる。坏身のうち19は、底面の平坦部はまだ残っているもの、20，22は、平坦面がほとんどわからないくらいに退化しており、また、口縁立上がり基部外面の段も不明瞭になりつつあり、後者2点が若干新しい様相を持つであろうか。（＋）期に位置づけられる。21の高坏は、色調、胎土、図示はできなかったが、口縁端部に面取りされることなどを見ると、坏類と同時期としても差し支えないが、半長脚で透かしが無いこと、坏部外面に2本の凹線があることなど、新しい要素を持っていることから一時期下り、H－44号窯期と位置づけることができる。23の壺蓋は、天井部を全てヘラケズリし、口縁部内面立上がり基部には、外面をナデ調整するときについたものか、指の押さえ痕が残る。前述したように、11とセットとなろう。24は小型の甕で、体部は肩が張り、底部外面は、静止ヘラケズリの後、轆轤回転によるヘラケズリを行なう。そのためか、胴部から底面へ変わる部分は、角度をもつ。胴部から上は、丁寧なナデ調整をする。口縁部は、内面がやや鈍いものの、5と同様な受け皿

状を呈することから、同時期、H－50号窯期と考えてよいであろう。

第5節　古墳の築造、追葬の時期について

前節で、出土した遺物について見てきたが、本節では、古墳の築造及び追葬の時期、回数について考えてみたい。最初に床面ごとのセット関係とその時期を設定する。
まず1次床面について。北群は、4と13が同時に存在するものと考えられ、SX1出土の坏類は、本来この群に伴うものであったと考えている。その時期は、（＋）期である。南群は、15と鉄鏃29,34が同時存在の遺物と考えられ、SX1外出土の高坏21はこの南群に伴なうと考えたい。時期は、H－44号窯期でも、より（＋）期に近い前半としておく。

次に2次床面について。北群では、図版4の3段目の写真のように、H－50号窯期とした5,9が他の遺物と同レベルで出土している。型式的には、両者が並存する時期と考えれば良いのだろうが、浅学ながら筆者の現在の知見では、両者の要素が余りにも離れていることと、南群1次床面の時期が、当群の大多数の遺物の時期が比較的に近いことから、同時に存在したとは考え難い。そのため、5,9をこの後述べる南群2次床面に伴うものと考え、北群2次床面の時期をH－44号窯期と考える。そして25～28の鉄鏃もその出土状態から、この時期に伴なうものと考えたい。1,3,11も当群に伴なうものと考えておきたい。南群の遺物で、16は、型式的には北群と同時期とすべきだろうが、出土場所が正反対の位置であることから、北群との同時存在は考えにくい。14,44は、H－50号窯期の少なくとも前半の時期は与えられる。このため、南群関しては、H－44とH－50の2時期を当てたい。鉄鏃は後者に伴なうと考える。

以上のことから、羽崎寺洞2号墳の築造時期、追葬の時期などを考えてみると、まず築造時期については、最も古い北群1次床面の時期、（＋）期（或いは極直前）とすることができ、初葬は（＋）期となる。追葬に関しては、最初が南群1次床面で、2次床面の2回と合わせ、3回の追葬があったとしたい。

第5章　ま　と　め

今回の調査では、当初の予想を遥かに超える成果をあげることができたといえよう。ここで、その結果をまとめておく。

1．1号墳は、横穴式石室が半壊し、遺物も皆無であった。このため、規模、築造時期は、解明できなかったが、残存する石室から構造的には、当古墳群通有の小規模な古墳であったと考えている。
2．2号墳は、墳丘の規模については、不明であったが、かなり良好な状況で横穴式石室が残っていたため、石室の規模が全長3.81m、最大幅1.55mで、胴張り隅丸の長方形プランを有し、2枚の床面を持つことが判明。出土した多数の須恵器類から、築造の時期は、猿投窯編年（＋）期、川合古墳群編年後Ⅲ期（6世紀後半ごろ）で、その後、H－50号窯期前半、川合古墳群後Ⅴ期前半（7世紀前半ごろ）までに、初葬と併せ4回の埋葬が行なわれたことなどが明らかになった。

最後に被葬者の階層について触れておく。これについては、大谷宏治氏が階層構造のモデルを作成されている。[7] このモデルが、即可児市の後期古墳群に当てはまるかは、市内でこれまでに調査された古墳のデータを分析した上でなければ正確には判断できないのだろうが、今後の課題に向けての予察として、あえてこのモデルに当てはめてみたい。氏のモデルによれば、羽崎寺洞２号墳の玄室長が約３．８ｍであること、出土遺物の内容が、須恵器類と、鉄鏃や刀子といった鉄器（武器）類ということから、階層Ⅴ、地域住民のうちの「有力家長層（歩兵）」ということができよう。

この見解の真偽については、十分なデータの収集とその分析をじっくりと行ない、見極めることとしたい。

（註　釈）

(1) 斎藤孝正「古墳時代の猿投窯」『断夫山古墳とその時代』東海埋蔵文化財研究会1989
長瀬治義「第5章　川合古墳群」『川合遺跡群』可児市教育委員会1994
尚、最終的な時期決定は筆者であり、その責任は筆者にある。

(2) 註（1）長瀬文献

(3) 同上

(4) 亀谷泰隆 他『羽崎古墳群』可児市教育委員会1985

(5) 鉄鏃の名称については、岩原　剛氏の分類に拠った。
岩原　剛「副葬品の変質」『東海の後期古墳を考える』東海考古学フォーラム三河大会実行委員会、三河古墳研究会2001

(6) 註（1）長瀬文献

(7) 大谷宏治「階層構造論」『東海の後期古墳を考える』東海考古学フォーラム三河大会実行委員会、三河古墳研究会2001

図版1　1号墳

調査前遠景

伐採後近景

表土除去後（東から）

図版２　１号墳

掘り下げ風景

奥壁裏込状況

床面検出時の玄室

西側壁（東から）

図版３　１号墳・２号墳

奥壁鏡石

西側壁掘り方（北から）

礫床残存状況

同上アップ

２号墳調査前遠景

１１出土状態

２号墳伐採後近景

図版４　２号墳

玄室掘り下げ風景

上１２　右１６　出土状態

右より
8,1,3,6,2
出土状態

右より
9,7,5
出土状態

左７、右５　出土状態アップ

上２７他鉄鏃　、下５　出土状態アップ

図版５　２号墳

２次床面検出時の玄室（南から）

同上（北から）

図版６　２号墳

東側壁

西側壁

奥壁

礫床面

閉塞石

１４等出土状態

図版７　２号墳

２１　出土状態

右から２４,１９等出土状態

１次床面検出時の玄室
（南から）

１次床面検出時の玄室（北から）

１次床面断ち割り断面（北側）

同上（南側）

図版８　２号墳

奥壁手前床面断ち割り状況

西側壁裏込状況

墳丘東側断面（西側）

墳丘東側断面（東側）

ふるいかけ作業

土入れ作業

芝貼り作業

図版９　２号墳

修景後の羽崎寺洞１号墳

上１　右２

6

7

9

図版１０　２号墳

3

4

5

11

8

12

図版１１　２号墳

１０

１３

１４

１６

１５

１７

１８

２１

図版１２　２号墳

２０

１９

２２

２３

２４

図版１３　２号墳

出土鉄器類（１）

出土鉄器類（２）

報告書抄録

ふりがな	はざきてらぼら1・2ごうふんはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	羽崎寺洞1・2号墳発掘調査報告書
副 書 名	
シリーズ名	可児市埋文調査報告
シリーズ名番号	３２
編集者名	吉田正人
編集機関	可児市教育委員会
所 在 地	〒509-0292　岐阜県可児市広見一丁目１番地
発行年月日	西暦２００１年　３月３０日

ふりがな 収集遺跡名	ふりがな 所在地名	所在地 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間 面　積	調査 原因
羽崎寺洞 1号墳	岐阜県可児市羽生ヶ丘 三丁目１２４番地	21214	04775	35° 24′ 55″	137° 05′ 25″	20010703 － 20010830	保存のための データ収集
羽崎寺洞 2号墳	岐阜県可児市羽生ヶ丘 三丁目１２４番地	21214	04776	35° 24′ 54″	137° 05′ 26″	1号墳　200㎡ 2号墳　200㎡	

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
羽崎寺洞 1号墳	古　墳	古墳時代 後期	残在長3.95m、最大幅1.64mの横穴式石室	なし	
羽崎寺洞 2号墳	古　墳	古墳時代 後期	全長3.81m、最大幅1.55mの無袖式横穴式石室	多数の須恵器、鉄鏃、刀子	玄室床面は、上下2枚の面を持つ

可児市理文調査報告32

羽崎寺洞１・２号墳発掘調査報告書

編　集　岐阜県可児市教育委員会
〒509-0292
岐阜県可児市広見一丁目１番地
Tel (0574)64-1111 Fax (0574)63-6751
平成13年 3月26日　印刷
平成13年 3月30日　発行
印　刷　(株)キング印刷紙工